# 隋唐鏡の二・三の問題について

西　村　俊　範

## はじめに

隋唐時代の鏡は漢時代の鏡とは大きく様相を変えた[(1)]。その変化の根本には，文様と文様表現を厳しく規定していた思想からの束縛がなくなったことがある。桎梏が無くなれば，文様表現も鏡の形状すらも自由になる。鏡自体の外形も多様になり，多彩な文様が我々の目には無秩序と映るほどに自在に組み合わされた。行き着くところでは，他に類例を持たない「孤例」となる鏡までも多く出現することになった。そのような隋唐鏡の顕著な特質を代表する例から，近年の発掘資料などで新たな解釈が可能になったものを二・三取り上げて述べてみたい。

**注**

（1）　a 西村俊範「中国の鏡」『開明堂英華』（1994年）215-219頁。
　　b 西村俊範「隋唐時代の鏡」『世界美術大全集東洋編 4・隋唐』（1997年）293-298頁。

## 1・シルクロードの香り

唐の文化の国際性については，ここで改めて述べる必要性を認めないが，鏡にもその特質は随所に及んでいる。海獣葡萄鏡の葡萄唐草文はその有名な一例である。古代地中海世界に起源を持ち，シルクロードを経由して東伝し，遂にはわが国薬師寺本尊台座にまで至っている。大量の人と文物がシルクロードを経由して唐の領域に入ってきた。唐文化に与える西方諸地域の影響は大きい。ここでは葡萄唐草文同様に，西方に起源を持つと考え

られる鏡の文様を取り上げてみたい。

《唐草文系》

唐草文系統の文様は，仏教とともに南北朝時代に既に流入しているので，中国でも独自の展開があり，唐時代に新たに流入した西方的要素を指摘することは難しい面もある。ごく特色的な例を挙げたい。図１の上海博物館蔵の初唐期の宝相華文鏡[(1)]は，内外区の文様共に特色あるパルメット系の文様を飾る。内区に６つ並ぶいわゆる宝相華文は，中心飾りの周辺に６つの側面パルメットを放射状に配して構成されている。外区の12に区切られた区画には，後期ギリシャ様式風の唐草に類似した文様３種が交互に繰り返されている。そのうちの１つは両側の巻き葉がアカントス葉のスタイルになる。これはササン朝ペルシャ風と言える。また，このアカントス唐草が内区の文様になったものに根津美術館蔵鏡[(2)](村上コレクション鏡)(図２)がある。精緻なもので，他に類例を知らない。中心飾りから両側に蔓草でつながったアカントス巻き葉が両側に展開するものが基本形で，そのアカントス葉の先端近くの巻いている部分を，隣のアカントス葉の先と上手く繋げて，間に逆向きの中心飾りを入れる。唐草の特質をうまく利用した文様展開と言える。イランのササン朝ペルシャ期の柱頭に類似の巻き葉の表現が見られ，ターク・イ・ブスターン大洞のアーチの下方両端にある聖樹文様の中にも見られる[(3)](図３)。これはホスロー２世代(在位591～628年)のものとされているので，時期的にほぼ同時期である。ササン朝ペルシャの文物は銀器・コイン・ガラスなどが大量に齎されており，このような文様が初唐期の鏡の文様に出現することも特に異とするに当らない。葡萄唐草文以外にも，様々な形状の唐草文が長期にわたって繰り返し重層的に中国に伝来してきた事をよく示す例といえる。

《祆教(ゾロアスター教)・景教(ネストリウス派キリスト教)系》

初唐期の四神十二支鏡・獣形鏡系の鏡にも西方の要素が指摘できる。図４の獣形鏡[(4)]の外区は十二分割されて十二支を描いている。その幅広の区画帯の上には何種かの獣の頭部だけが浮き彫りで描かれる。仔細に見ると，地

に小さな珠文を並べたり，霰地風にしたり，小円弧で囲ったりと手数をかけた表現になっている。この装飾手法は，西安市未央区北周安伽墓出土の囲屏石榻の床側面の装飾文様[5]（図５）と同一手法である。安伽墓では連珠の線で区切られた区画に，獣・鳥・象の頭部が入る。中には連珠円文でさらに楕円形に囲ったものもあり，これが図４に見えるような細かな装飾が狭い空間に施された理由となるものであろう。安伽はその姓が示すようにソグド系の人物であり，石彫の文様も祇教（ゾロアスター教）をはじめとするソグド系統の文化様相を示す文様で占められている。墓は北周の大象元年（579年）の埋葬で，時期的にもかなり近い。従ってこの文様は中央アジア系民族の独特の文様と考えられる。

また，アスターナ出土の中国錦にも同種の獣頭を連珠で円く囲った文様のもの[6]（図６）があり，類例が中央アジアに跨って分布することから，やはりゾロアスター教系統の文様と考えられている。中国でこのような文様が特注して織られていたと考えられる。従って中国国内で類似の文様が鏡に採用されてゆくこともありえた訳である。鏡の文様として用いられる場合には，文様全体がすべてこのようなゾロアスター教系統の文様でとりまとめられている訳ではない。目新しくエキゾチックな文様を部分的に借用したと見るべきであろう[7]。

図７の五島美術館蔵鏡[8]は唐鏡中の白眉とも言える，製作のとびきり優れた一鏡である。綬を垂らした四角い逆さ卍文の飾りの両側に，向かい合う２体の飛天が寄り添う。他の２つでは人面鳥身の異形の人物（迦陵頻伽とされる）が手に宝瓶形のものを捧げ持って蓮華の上に足を乗せる。この卍の図形は仏教の卍とは裏返し（逆卍）になっている。景教（ネストリウス派キリスト教）の十字紋飾牌がすべてこの形態を取ることが古くから知られている[9]（図８）。紛らわしいものではあるが，飾牌自体の形態の類似性から見ても，仏教の卍とはせずに十字紋の変形文様と見た方が良いと考えられる。そう考えると，人面鳥身像の方もこれを仏教の迦陵頻伽と見るべきかどうかが問題となってくる。『仏説阿弥陀経』に見える迦陵頻伽は極楽で妙なる音

図１　宝相華文鏡（上海博物館蔵）

図２　パルメット文鏡（根津美術館蔵）

図３　ターク・イ・ブスターン
大洞（イラン）聖樹文様

図４　獣形鏡（五島美術館蔵）

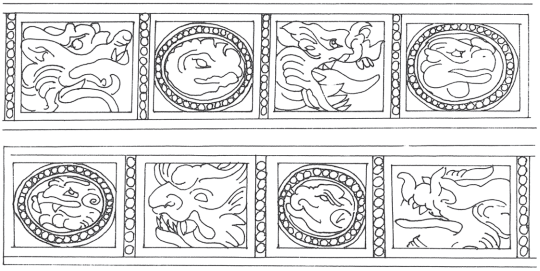

図５　安伽墓石榻装飾文様

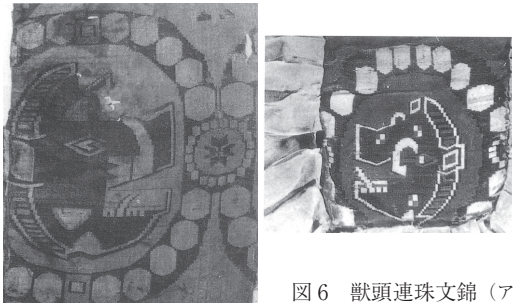

図６　獣頭連珠文錦（アスターナ墓群出土）

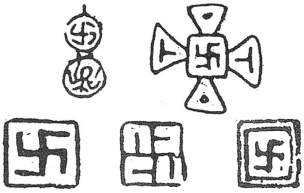

図８　十字紋飾牌

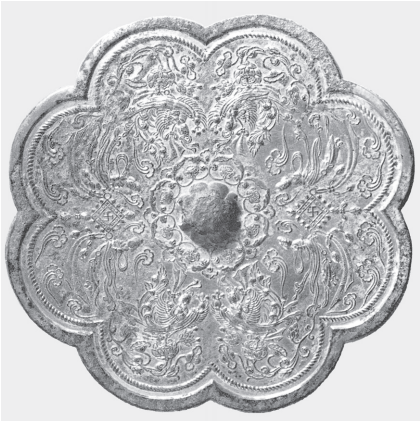

図７「迦陵頻伽」八花鏡
（五島美術館蔵）

図９　史君墓石室浮彫文様

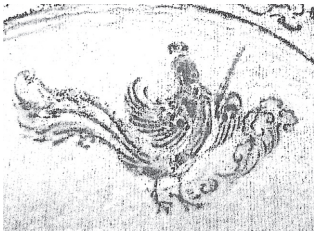

図 10　迦陵頻伽吹笙鏡（部分）

楽を奏でるものとして描写されている。[10] 鏡の像は確かに蓮華に両足を載せてはいるが，手に持つものは楽器ではなく，上に三つ叉の蕾状のものを付けた宝瓶のような容器と飾り紐である。

近年発掘された，西安市未央区の史君(尉各迦)墓はサマルカンド出身のゾロアスター教を信仰するソグド人の墓である。埋葬年代は北周の大象２年(580年)である。この史君墓の石堂北壁の浮き彫り[11](図9A)に見える飛天はあきらかに同じ形の瓶と食物を載せた皿を持っている。さらに同じ北壁の別の場面では，この瓶が蓮池の表現かと思われる渦の上に単独で描かれ，上に着く三つ叉状のものが明瞭に確認できる。(図 9A)さらに，石堂南壁の２か所の拝火壇の脇には人面鳥身で有髭の迦陵頻伽に良く似た姿の人物(図 9B)が描かれ，さらには石堂基壇の側面をはじめ随所に人身有翼ないし無翼の飛天の姿が認められている。飛天も人面鳥身像もそれだけでは直ちに仏教的図柄と決めつける事はできず，問題の宝瓶形も仏教の「如意宝珠」とは直ちに断定はできない。[12] 従って，問題の五島鏡の図柄も単純に仏教の迦陵頻伽・飛天と決めつけてしまう事には，大いに疑問が残るのである。むしろゾロアスター教系の文様とも解釈できる。もちろん，仏教が中国に北伝してゆく過程で，経路の途中の文化要素を吸収してゆくことは充分に想定できるが，五島鏡のわずか２つの文様要素にそろって他教との関連を考えざるを得ない事は問題が大きい。むしろ一義的には祆教・景教の図柄が，今までにない目新しいものとして受け入れられたとみなしては如何であろうか。

《仏教系》

一方，間違いなく仏教の迦陵頻伽とみなされる文様も存在する。『中原蔵鏡聚英』所載鏡では，上部に笙(または竽)を吹く人頭鳥身像がある[13](図10)。奏楽の姿であり，迦陵頻伽に当てはまろう。迦陵頻伽は敦煌楡林窟第25窟の阿弥陀浄土変図に見える。[14] 前引の「仏説阿弥陀経」を絵画化した図像と言えるもので，鼓を打ちながら舞う人物の横で琵琶を奏でている。また，正倉院の呉竹竽では，壺部の側面に銀平脱で竽を吹く姿に描かれて

いる[15]。また，飛天も祆教系の図柄が伴わないものは素直に仏教の飛天とみなしてよいと考える。台湾・故宮博物院蔵鏡[16]（図11）やフォッグ美術館蔵鏡[17]などがその例となろう。

図 11　飛天山岳文鏡
（台湾・故宮博物院蔵）

以上，西方起源の文様のいくつかを取り上げた。そのほとんどは鏡の文様の中に部分的に取り入れられ，違和感なく溶け込んだものである。唐代文化の柔軟性を良く示す好例と言えよう。

**注**

（1）　陳佩芬『上海博物館蔵青銅鏡』（1987年），図版68。類例は何例かある。大阪市立美術館・久保惣記念美術館・センチュリーミュージアム蔵鏡など。大阪市立美術館『隋唐の美術』（1978年），図版233。和泉市久保惣記念美術館『和泉市久保惣記念美術館蔵鏡図録』（1985年），図版76。センチュリーミュージアム『鏡―その神秘と美』（1992年），図版32。

（2）　西村俊範『開明堂英華』（1994年），図版61。百橋明穂ほか『世界美術大全集・東洋編 4』（1997年），図版192。

（3）　朝日新聞社『週刊朝日百科世界の美術―古代オリエントの美術Ⅱ』（1978年），107頁。

（4）　Sueji Umehara「The Late Mr. Moriya's Collection of Ancient Chinese Mirrors」『Artibus Asise』18-3・4（1955年），fig.7。
　類鏡は根津美術館・上海博物館ほか，陝西省永寿県出土品・安徽省望江県出土品などに見える。西村註（2）前掲書，図版62。陳註（1）前掲書，図版69。『文物』1982年第 3 期，94頁。『考古』1987年10期，888頁。

（5）　陝西省考古研究所「西安北郊北周安伽墓発掘簡報」『考古与文物』2000年第 6 期，表紙裏。陝西省考古研究所「西安発現的北周安伽墓」『文物』2001年第 1 期，図33・34・35。Rong Xinjiang「The Illustrative Sequence on An Jia's Screen : A Depiction of the Daily Life of a Sabao」『Orientations』2003/February。

（6）　趙韋「魏唐織錦中的異域神祇」『考古』1995年第 2 期，179頁・図版 4-1・2。

（7）　この獣頭 3 つのみを主文様として描く鏡もあるが，外区の銘文は典型的な唐鏡のもので，宗教色はない。根津美術館（村上コレクション）蔵。

(8)　「はじめに」註(1)b前掲書，図版200。
(9)　金申「景教的十字紋飾牌」『中国文物報』1996年11月10日号。
(10)　黄渭漁「人頭鳥迦陵頻伽」『羊城晚報』1980年12月16日号。
(11)　西安市文物保護考古所「西安北周涼州薩保史君墓発掘簡報」『文物』2005年第3期，図27・31・40・41・50など。
(12)　王趁意『中原蔵鏡聚英』(2011年)，図版61。
(13)　王註(12)前掲書，図版113。
(14)　樋口隆康『世界の大遺跡9―古代中国の遺産』(1988年)，図版204。
(15)　阿部弘『正倉院の楽器』(1976年)，第60図。
(16)　台湾・故宮博物院『故宮銅鏡特展図録』(1986年)，図版120。
(17)　梅原末治『欧米における支那古鏡』(1931年)，図版56。梅原末治『唐鏡大観』(1945年)，図版6。

## 2・漢鏡の名残り

隋唐鏡の初現が正確にはいつごろで，どのような様相であったかについては従来はよくわかっていなかった[1]。四神十二支鏡の最古式(図12)が文字通り最古のものであり，これと鏡体と作行き・銅質が酷似していて同時期の製作と思われる獣形鏡や唐草文鏡・四葉文鏡が知られていて，これらよりも遡ると思われる鏡は今のところ他に見当たらない。1957年には，開皇3年(583年)の墓誌を持つ河南省陝県劉偉墓[2]から，図版が無いものの，西安市三橋南出土鏡[3](図13)と同巧と考えられる四葉連弧文鏡の出土が報じられた。1958年には所謂隋鏡が隋のごく初頭に確実に製作されていたことが確認されていた[4]。ただし，想定される漢鏡の製作年代との開きはまだ極めて大きく，漢鏡と隋唐鏡がどの時期にどのようにつながるのか，あるいは両者の間に大きな時間的断絶があるのかは，依然として不明のまま残された課題であった。

《終末期漢鏡》

一方，1959年の『陝西出土銅鏡』には外区に鋸歯文や櫛歯文を幾重にも重ねた，何とも異様な環状乳神獣鏡が掲載された[5]。配列の順で言えば隋鏡の直前，漢鏡の最後という位置付けで掲載されていた。ただし時代表記が

図 12　四神十二支文鏡（A 群）

図 13　四葉連弧文鏡（A 群）

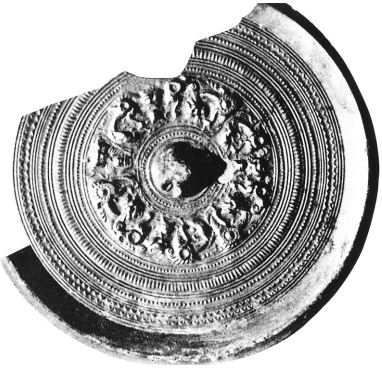

図 14　環状乳神獣鏡

図 15　環状乳神獣鏡

無く，製作年代の確認は全くできなかった(図14)。1983年には広西壮族自治区欽州県の，隋から初唐期と考えられる墓から同類の環状乳神獣鏡[6](図15)が出土し，あるいはこれらが隋鏡の直前に位置する漢鏡かとようやく想定できるようになってきた。

そうこうするうちに，1992年以降に至って，これらに類似して，内区は漢鏡のものでありながら，外区に鋸歯文・連珠文・櫛歯文などを何重にも連ねる様式の鏡が，北周・北斉期の墓葬から出土することを示す報告が

図16　盤龍鏡

図17　環状乳神獣鏡

次々となされてきた[7]。しかもそれらには，神獣鏡以外にも画像鏡・方格規矩鏡・盤龍鏡などが含まれていた。また，墓葬の年代も，墓誌で確認できるものでは北周・建徳５年(576)・建徳７年と宣政元年(578)があって，まさに隋建国直前のものがあった。現在の所最も遡る例では，北斉の天保６年(555)の山西省太源市ＴＭ62出土の盤龍鏡[8](図16)がある。よってこれらの鏡に現状で約25年ほどの製作年代幅があることも確認できている。

このうち，何例かある北周・北斉期の環状乳神獣鏡を検討してみると，『中原蔵鏡聚英』所載鏡[9](図17)や静岡県神田古墳出土鏡[10]のように，環状乳の位置が通常のものとは異なる例がある。また，西安市韓森寨M434出土鏡[11](図14参照)のように，普通３・４頭の獣を５頭描こうとして描き切れず，結果的に環状乳が１つ多くなっている事例などが見られる。時期的にも本来の神獣鏡の製作時期とは300年近い間隔が空いており，よく仿古作の特色を示している。一方，咸陽市王徳衛墓出土の環状乳神獣鏡は文様がよく整って破たんが見られず，ふみ返した上で周辺を改変した可能性も残っている[12](図18)。他の鏡種でも，咸陽市宇文俠墓出土鏡[13]と王趁意氏蔵の盤龍鏡[14]は，ふみ返した上で，鈕座と外区を改変している。このことから，北周・北斉期の鏡の製作技法としては，ふみ返し法と鋳型に直接彫りこむ通常の

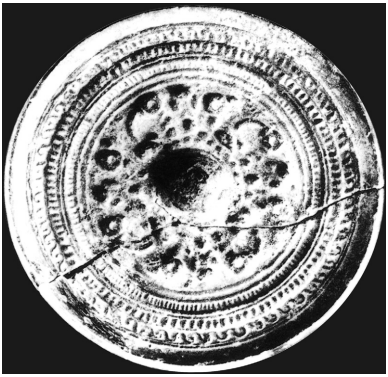

図 18　環状乳神獣鏡

図 19　環状乳神獣鏡(根津美術館蔵)(B 群)

製作法が並存していたことが考えられる。[15]

現在は，最終末期漢鏡と最初期の隋唐鏡の接点がようやく見えてきた段階であるが，この終末期漢鏡の下限はどう考えられるであろうか。根津美術館蔵鏡[16](図19)は北周・北斉期鏡と同一の，変容した環状乳神獣文を描く。ふみ返しではない。一方で外区には外周のいくつかの小文様帯の代わりに銘帯があり，「鳳従台裏出，龍就匣中出，光発菱自動，不夜月恒明」の銘がある。これは最古式の四神十二支鏡のさらに後に出現する隋鏡の銘文と軌を一にするタイプのものである。それでいて製作は粗雑で，銅質・作行きが最古式四神十二支鏡などに非常に似通っている。銘文の部分にも後世の作為は認められない。したがって，ごく常識的に見て，この手の終末期漢鏡が隋時代まで継続して製作され，一時期は最初期隋唐鏡と併行して製作されていたと考えざるを得ない。墓誌で確認できる最終末期漢鏡の確実な下限が，隋建国の581年のわずか 3 年前，また劉偉墓の四葉連弧文鏡の開皇 3 年(583年)のわずか 5 年前の578年であるから，このような推定もあながち無理とも言えないわけである。また，隋の支配階層は基本的に北周・北斉期と同系統の人々である。社会情勢的に見ても，北周・北斉期鏡の製作が，鏡製作以外の外部的要因で断絶するといった状況もまた推定しに

図 20　四神鏡（A群）

く い。

《最初期隋唐鏡》

次に，最初期の隋鏡の状況を検討したい。最初期の隋鏡には二つのグループがある。

A群は従来知られている四神十二支鏡・獣形鏡・唐草文鏡・葉文鏡などのグループである。四神文の例としては，十二支を描かないスタイルで，隋・開皇 7 年(587年)の墓誌を持つ陝西省長安県宋忻墓出土鏡が最古の例となる[17](図20)。四葉文は先述の開皇 3 年(583年)である。ただ，いわゆる「隋鏡」と名付けられた鏡の製作年代がすべて隋以降の製作であるという確証は一切なく，隋以前に遡る可能性も充分残されている。A群は内区文様は異なっていても，断面台形の口縁，そのすぐ内側の大ぶりの鋸歯文帯，鈕座の円圏に囲まれた珠点帯などが共通している。特に，鈕の周囲の珠点帯は，あきらかに終末期漢鏡と類似のもので，有節重弧文帯の崩れたものと考えられる。A群のうち四神十二支鏡は，初唐期には大型で作行きの優れた鏡へと発展していった。

この最古式の四神十二支鏡(図12参照)などは，蠟型技法が用いられていることが推定されている[18]。特に十二支の動物の周囲には，鏡胎に蠟で製作した文様を貼り付けた痕跡と考えられる不定形の楕円形状の凹凸の線が見えている。大体の基本形のみを作った蠟製の鏡胎の上に個別の文様の薄い蠟膜を貼り付けたものであろう。終末期漢鏡とは推定される製作技法が異なっている。この製作技法の違いは，両者の製作年代が重なっている可能性があるだけに見逃す事ができない。

もう一つのB群は，内区外周に鋸歯文などを何重にも重ねるスタイルが，終末期漢鏡と共通するスタイルのものである。獣形文・獣頭文・連珠文の

図 21　獣形鏡（B群）

図 22　獣形鏡（A群）

例がある。断面三角形の外縁，内区外周の文様帯のうち，内区に近い一つが断面三角形状に盛り上がって，内傾する斜面になること，鈕座の珠点帯など，全体の印象は終末期漢鏡にかなり近く，系譜的なつながりを強く感じさせる。但し，主文には共通するものが認められない。個人蔵の獣形鏡[19]（図21）は，内区がA群の獣形鏡（図22）の獣とは形態が異なり，周囲に散在する雲文風の点の形も大きく異なっている。むしろ後の初唐期の獣形十二支鏡の獣文に近い。陝西歴史博物館蔵鏡[20]・天理参考館蔵の獣頭文鏡[21]（図23）は初唐期の最新型式の四神十二支鏡や獣形十二支鏡に充塡文様として用いられる獣頭と，頭を左右に瘤状に分ける描き方が極めて似通っている[22]。また，西安市M586号墓出土の獣形鏡[23]（図24）は鋳のきつい鏡で文様が不鮮明であるが，菱形の四乳が天理鏡と，獣の形状が図20の獣形鏡とかなり類似している。この３者にはあきらかに類縁関係が認められる。製作年代も初唐期に入る可能性があろう。

また，陝西歴史博物館蔵鏡[24]と西安市馬騰空北村北M47号墓[25]出土の連珠文鏡は，あるいは北斉・北周期の作鏡かと見まがう出来で，この形の連珠と四葉文を組み合わせた文様の鏡が，開皇15年（595）の河北省平山県の崔大圏墓から出土している[26]。

図 23　獣頭文鏡（天理参考館蔵）（B群）

図 24　獣形鏡（B群）

図 25　パルメット文鏡（B群）

また，隋・大業 6 年(610年)の西安市郭家灘姫威墓[27]，大業 7 年(611年)の寧夏固原県史射勿墓[28]，西安市熱電廠41号墓[29]，陝西省戸県一号鉄路専線第385号墓[30]などから出土する小型のパルメット文鏡(図25)などは，周囲の小文様帯の数が少ないものの，そのうちの一つが断面三角形状に内傾斜面になる点が共通しており，やはりB群に連なるものと言える。この小型鏡はかなりの数の類例が 7 世紀代に出土している。製作は初唐代にまで継続していよう[31]。さらに，この小型のパルメット文鏡とよく類似した小型鏡で，内区画が盤龍文鏡の踏み返しになる例があることも注目される[32]。

A群には外周に鋸歯文などを重ねるものが見当たらず，A・B両群にはかなり明確な違いが認められる。以上の考察から，明らかになったことがある。A群の最古式の四神十二支鏡には，内区の四神の間に神仙像を挟む

図 26　伯牙弾琴像

図 27　環状乳神獣鏡（A群）
（クリーブランド美術館蔵）

例が何例かあり，それには伯牙の弾琴像も含まれていた[33]（図26）。これを従来は隋唐鏡に見える，文様の部分的倣古の様相の一例と見なさざるを得なかった。しかし，終末期漢鏡の下限年代が隋代にまで下がるのであれば，これはむしろ同時期に並存した他のグループの鏡からの文様の部分借用とみなすべきものとなる。むしろそのほうが，文様の扱われ方としては理解しやすくなる。クリ―ブランド美術館蔵鏡[34]（図27）に見られるような，環状乳神獣鏡の文様を完全に分解して主文にしてしまうといった極めてユニークで個性的な取扱い方は，古い時期の鏡の直接的な倣古というよりもむしろ同時期に存在している文様の手軽な剽窃なればこその例（結果として倣古となる）であろう。その点で，A 群は終末期漢鏡とは系統の異なる工人の手になる鏡であろう。

逆にB群は作行き全体が終末期漢鏡にかなり近いものがあり，鋳造技法面がまだ不分明であるが，同一の系統の工人の作鏡の可能性も残っている。B群と終末期漢鏡を一つの系統・一連の流れと考えて取り扱うことも可能ではなかろうか。

以上に紹介した個別の事例を最終的にどのように整合的に解釈するかは，終末期漢鏡の下限をもう一段厳密に確定するなど，綿密な作業が必要になる。資料の少ない現状で断定的に扱う必要を認めない。さらなる出土例などの資料の増加を待ちたい[35]。特に鋳造技術面が大きな問題となるが，蠟型

鋳物技術に関しては，現状では鏡製作以外の分野からの技術の導入であった可能性も視野に入れておくべきかと考えており，研究の視野もまた広げておく必要があろう。

**注**

（1） 西村，「はじめに」の註（1）前掲書 a 215頁。b 293頁。

（2） 黄河水庫考古工作隊「1956年河南陝県劉家渠漢唐墓葬発掘簡報」『考古通訊』1957年第4期，14・15頁。なお秋山進午氏は「ここからは典型的な隋鏡である四神十二支鏡が出土している。」と記すが，全くの事実誤認である。秋山進午「隋唐式鏡綜論」『泉屋博古館紀要』第11巻(1995年)，7頁。

また，この劉偉墓は夫婦合葬墓で，劉偉が北周・保定4年(564年)に亡くなった後，開皇3年(583年)に夫人が亡くなって合葬された墓である。したがって，この四葉連弧文鏡の製作年代はさらに遡る可能性も残されている。

（3） 陝西省文物管理委員会『陝西出土銅鏡』(1959年)，図版95。陝西歴史博物館『千秋金鑒―陝西歴史博物館蔵銅鏡集成』(2012年)，282頁上。

（4） 中国の出版物では，この類の年代を北朝・南北朝とするものがあるが，確証となるものが示されていない。たとえば，王第1章註(12)前掲書，図版124解説。

（5） 陝西省文物管理委員会『陝西出土銅鏡』(1959年)，図版79。

（6） 広西壮族自治区文物工作隊「広西壮族自治区欽州隋唐墓」『考古』1984年第3期，260頁・図15下。環状乳式だけではなく，対置式神獣鏡の変形文様の例も確認されている。湖南省長沙市左家塘M8出土鏡。周世栄『古銅鏡』(1995年)，図版377。

（7） 員安志『中国北周珍奇文物』(1992年)。

（8） 山西省考古研究所「太原西南郊北斉洞室墓」『文物』2004年第6期，45頁。

（9） 王第1章註(12)前掲書，46頁・付図5。

(10) 『静岡県史・資料編2（考古二）』(1990年)32頁。森下章司・鈴木一有・鈴木敏則「磐田郡豊岡村神田古墳―中国鏡出土の後期古墳」『浜松市博物館報』第13号(2000年)，22-26頁，図版8-10。

(11) 註（5）と同一。

(12) 註（7）前掲書，54・55頁・図108。

(13) 陝西省考古研究所「北斉宇文倹墓清理発掘簡報」『考古与文物』2001年第3期，図25。

(14) 王第1章註(12)前掲書，51頁・付図11。

(15) 上野祥史氏はこの北周・北斉期の鏡を，漢鏡の「ふみ返し模倣」と性格を限定し，時期も5世紀まで遡るものと認定している。また，何とも信じがたいことにその下限は示されておらず，「壁」になっている。性格・時期の両

面で全く首肯できない。上野祥史「神獣鏡の生産実態―イメージからの脱却」『泉屋博古館紀要』第26巻(2010年)，73頁。

また，五島美術館蔵鏡とトッドコレクション鏡は，実見する機会を得て種々検討したいと考える。車崎正彦「六朝鏡」『考古資料大観』第５巻(2002年)，図204-6。Milan. Rupart and O. J. Todd『Chinese Bronze Mirrors』(1935年)，No. 142。また車崎図204-5・浜松市博物館註(10)図版11-1も同様である。

(16)　西村俊範「中国鏡の新資料―村上英二氏コレクションより―」『日本美術工芸』第659号(1993年)，15・16頁。西村俊範『開明堂英華』(1994年)，図版57。なお，この図録では「隋唐鏡のなかの漢鏡模倣作」という表現で紹介し，四神十二支鏡最古式の次に配置した。現在もこの認識で妥当であったと考えている。

(17)　1994年までは，四神文鏡が確実に隋初に遡ることを示す確たる論拠は存在しなかった。陝西省考古研究所隋唐研究室「陝西長安隋宋忻夫婦合葬墓清理簡報」『考古与文物』1994年第１期，35頁。

(18)　第１章註(１)久保惣記念美術館前掲書，図版73解説。

(19)　個人蔵。『小さな蕾』1991年６月号。

(20)　陝西歴史博物館註(３)前掲書，280頁下。

(21)　天理大学付属天理参考館『中国古代の鏡』(1990年)，図版44。

(22)　長沙市絲芽沖39号墓出土鏡，中文大学文物館『中国古代銘刻文物』(2001年)，図版65。大和文化館蔵鏡，大和文化館『大和文化館所蔵品図版目録』5(1976年)，図版105。カーティスコレクション鏡，J. A. KOOP『Early Chinese Bronzes』(1924年)，PL.73。

(23)　中国社会科学院考古研究所『西安郊区隋唐墓』(1966年)，図版41-2。

(24)　陝西歴史博物館註(３)前掲書，275頁。

(25)　張小麗「西安新出土唐代銅鏡」『文物』2011年９期，84頁，図16。

(26)　河北省文物研究所・平山県博物館「河北平山県西岳村隋唐崔氏墓」『考古』2001年第２期，63頁，図11-2。

(27)　陝西省文物管理委員会「西安郭家灘隋姫威墓清理簡報」『文物』1959年第８期，図16。

(28)　寧夏文物考古研究所・寧夏固原博物館「寧夏固原隋史射勿墓発掘簡報」『文物』1992年第10期，20頁，図13。寧夏回族自治区固原博物館『固原南郊隋唐墓地』(1996年)，黒白図版25.

(29)　西安市文物管理処「西安西郊熱電廠基建工地隋唐墓葬清理簡報」『考古与文物』1991年第４期，79頁・図27-5。

(30)　陝西歴史博物館註(３)前掲書，281頁上・下。

(31)　車崎正彦氏は「隋鏡へつながる鏡で，おおよそ６世紀後半の製作と考え

図 28　方格規矩八花鏡

図 29　方格規矩四神鏡

る」とするが，終末期漢鏡の年代問題は既に固定観念ではとらえられない段階に来ており，それほど単純な問題ではない。車崎註(15)前掲書，204頁。

(32)　陝西歴史博物館註(３)前掲書，277頁上・279頁上・下。

(33)　註(５)前掲書，図版88。「はじめに」の註(１)b 前掲書，293頁・図171。

(34)　The Cleveland Museum of Art『Circles of Reflection — The Carter Collection』(2000年)，PL47。

(35)　この点の解明が進めば，千葉県市原市姉ヶ崎二子塚古墳出土の四神十二支鏡・正木美術館蔵の四獣十二支鏡も，より踏み込んだ解釈が可能になるものと期待している。杉山晋作「あらたに発見された姉ヶ崎二子塚古墳の鏡」『史館』第４号(1974年)。千葉県立房総風土記の丘『房総の古鏡』(1980年)，図版40。
正木美術館『正木美術館出品目録』NO.13(発行年不詳)。

## 3・古代への郷愁

様々な時代に，色々な様式の「仿古」が出現することも，中国の文化の大きな特色と言える[(1)]。鏡もその例外ではあり得ない[(2)]。唐鏡にも，特にその後半の中・晩唐期にはかなり顕著になってくる現象である。その一部を考察したい。

図 30　方格規矩四神鏡
（北京・故宮博物院蔵）

図 31　四龍鏡

《ふみ返し鏡》

ふみ返し鏡が中・晩唐期に増加することについては既に述べた[3]。単純なふみ返しが大半を占めるが，中には一工夫加えたものも存在する。方格規矩鏡を八花形に改変した寧夏・固原市出土鏡[4]（図28）や銘帯鏡の外区を流雲文帯に改変した西安市郭家灘出土鏡[5]，前漢の連弧文鏡の鈕座と四乳座を改変したもの[6]，同じく前漢の葉文鏡を方鏡に改変した西安市雁塔区瓦胡洞出土鏡[7]などがある。鋳型の段階での改変である。すでにふみ返しが一般的に行われている時代であり，模倣対象が極めて手広いものであったことが分かる。ふみ返しが完全な時代的な特色であることを改めて強調しておきたい[8]。

《仿古鏡》

ふみ返しからさらに一歩進んで，古い時代の鏡を真似て最初から鋳型に彫りこんで製作したと考えられる鏡も存する。その対象となる鏡の大半は盛唐期の鏡であったが，中には漢鏡の模倣鏡が含まれている。西安市韓森寨東南10号唐墓[9]出土鏡は前漢式の方格規矩四神鏡（図29），北京・故宮博物院蔵鏡[10]（図30）や西安市韓森寨M561出土鏡[11]は，いささか改変も加えているも

図 32　蟠螭文鏡

図 33　八卦文鏡

のの，いずれも後漢タイプの方格規矩四神鏡の模倣品である。河南省偃師杏園M2503出土鏡[12]（図31）・西安市黄河機械廠出土鏡[13]などは後漢後期の四龍鏡の模倣品である。また，洛陽市北揺M３出土鏡[14]（図32）・陝西省長武県出土鏡[15]は，春秋・戦国期の青銅容器に見える蟠螭文を鏡に用いている。鏡には同一文様のものが無く，鏡以外からの借用文様である。発掘出土品以外に説き及べばまだかなりの鏡種の仿古品が確認できるので，この時期に於いてはかなり普遍的に行われていた手法と見るべきであろう。ふみ返し・仿古を合わせれば相当の割合を占めたはずで，中・晩唐期の作鏡は，新規の文様展開が新味に乏しく，相当に停滞していた事は間違いない。

《年号鏡》

いわゆる紀年鏡は，鏡の研究の上では重要な指標となるものである。ただ，時代が中・晩唐期に入るとその時点の年号ではない，かなり古い過去の年号を入れる例が登場してくる。研究上厄介な存在となるが，当時の中国では過去の歴史を客観的に振り返り，観察・分析する歴史意識が既に存在している。このような現象もある意味必然的なもので，むしろ時代的には登場が遅いとも言えるかもしれない。

安徽省望江県出土鏡[16]（図33）は，鈕座周囲の八卦文と「花開鶴舞，月満鴻

図 34　月宮図鏡（上海博物館蔵）

図 35 「武徳五年」銘四神十二支鏡

騫，龍門動色，人玉与言」などの銘から中唐以降の鏡と知れる。しかし，「建元元年五月五日広陵泰(太)守河南侯造」の銘がある。建元元年は歴史的には３度あり，それぞれ前漢の紀元前140年・東晋の紀元343年・南朝斉の476年となる。少なくとも300年近く前の年号を意図的に入れている。

上海博物館蔵鏡[17](図34)は，内区に月宮図(いわゆる月兎文)が描かれる。その周囲に三重に銘帯を巡らせ，中に「開元十年(722)鋳成」と年号を入れる。外形は八花形である。月宮図鏡には墓葬出土例が乏しく，年代を決めにくいが，文様からみて中唐期中心の鏡であり，八稜形のものがかなり存するので，盛唐後半には出現していたとみている。玄宗代の千秋節との関連を指摘する意見もある[18]。ただ，いずれにしても年号が古すぎる。銘文自体も千秋節に触れていない。銘文を何重にも連ねる手法は安徽出土鏡に共通しており，文様もふみ返しており，銘文も踏み返し時のものであろう。中唐以降の作品とみなすべきと考える。

湖南省湘．唐(ニ)29：323出土鏡[19](図35)は唐の四神十二支鏡のスタイルで，「武徳五季(622年)歳次壬午八月十五日甲子揚州揔管府造青銅鏡一面……」の銘があるが，鈕の脇にも「唐武徳鑑」の文字があって，後世の作品とわかる。掲載書はふみ返しと考えて「元仿唐式」とするが，かなり後世のふ

図 36 「武徳五年」銘四神十二支鏡

図 37　貼銀画像鏡

み返しであることだけは確実と言える。しかしよく見ると，四神の内の朱雀と白虎は極めて稚拙な表現であり，唐代・武徳年間の四神の表現ではありえない。そう見てくると一見元代などのふみ返しではない，当時の仿古作の可能性を考えてしまうのであるが，この鏡には宋代の「博古図」に完全に同一文様の鏡と思われるもの[20]（図36）が掲載されている。朱雀と白虎の表現も全く同一である。従って，この鏡が元代などでのふみ返しの原鏡であり，「博古図」の時代（北宋代）よりもさらに古い時期に，初唐期の年号入りの四神十二支鏡の仿古作が作られた可能性が高くなる[21]。こういう仿古鏡は宋代には少ないので，例えば中・晩唐期に仿古鏡として製作された鏡が「博古図」にそのまま掲載され，元代ごろにさらにふみ返されたと解釈することが一番妥当な推定ではなかろうか。

河南省孟津県で収集された貼銀鏡[22]（図37）は，銀板に画像鏡風の神仙と車馬を打ち出している，内区外周の銘帯に「永元五年」の年号がある。永元五年は歴史的に後漢の89年のみである。貼銀鏡は唐以前には例がないため[23]，これも古い年号を入れた仿古鏡の一例である。しかしまたこれも宋以降の製作を第一候補とはしづらい。銀盤の文様が極めて複雑であるにも関わらず，製作自体は相当に粗雑であるので，このような銀板打ち出し技術が存

在しつつも技術水準が低下している中・晩唐代の仿古鏡の可能性が一番高かろう。

以上，4点を取り上げたが，これらも事象としては前述のふみ返し・仿古と共通して相似た現象であり，それがたまたま年号にまで及んだものと考えるべきであろう。その根底にあるのは根強い尚古思想であり，尚古的なものを良しとする風潮が定着すれば，それが文様にとどまらずに銘に及ぶことも当然考えられるわけである。

**注**

（1） 西村俊範「訳者あとがき」『久保惣記念美術館紀要』第5号(1993年)，70～77頁。

（2） 傅大卣「談仿漢式銅鏡」『中国文物報』1989年9月8日号。

（3） 西村俊範「中・晩唐期の鏡と日本への影響」『人間文化研究』第28号(2011年)。

（4） 寧夏文物考古研究所・固原市原州区文管所「寧夏固原市南源唐墓発掘簡報」『考古与文物』2007年第5期，37頁・図13。

（5） 陝西省文物管理委員会『陝西省出土銅鏡』(1959年)，図版36。

（6） 王辛余「唐仿西漢連弧紋四乳団花鏡」『中国文物報』2001年11月14日号。

（7） 西安市文物保護考古所『西安文物精華―銅鏡』(2008年)，図版120。

（8） 洛陽出土の四神十二支鏡は周辺部を極端に拡大した大型鏡である。唐代のふみ返しとするにはいささか銅質に疑問が残るので除外した。洛陽市博物館『洛陽出土銅鏡』(1988年,)彩色図版5。『中国青銅器全集』16巻(銅鏡)(1998年)，図版102。

（9） 註(8)前掲『中国青銅器全集』，図版165。

(10) 故宮博物院『故宮博物院歴代芸術館陳列品図目』(1991年)，図版743。丁孟『銅鏡鑑定』(2000年)，38頁。

(11) 中国社会科学院考古研究所『西安郊区隋唐墓』(1966年)，図版47-1。

(12) 徐殿魁「唐鏡分期的考古学探討」『考古学報』1994年第3期，325頁・図12-4，図版1-6。中国社会科学院考古研究所『偃師杏園唐墓』(2001年)，140頁・図130-3，図版36-5。

(13) 徐進「西安東郊黄河機械廠唐墓清理簡報」『考古与文物』1992年第1期，26頁・図3-1。

(14) 洛陽市博物館註(10)前掲書，図版43。

(15) 陝西省博物館『隋唐文化』(1990年)，図版28。

(16) 宋康年「安徽望江県出土南朝銅鏡」『考古与文物』1988年第4期，30頁。

望江県文管所「安徽望江発現一件八卦銘文銅鏡」『文物』1988年第８期，58頁。

(17)　陳第１章註(１)前掲書，図版89。

(18)　孫遇安「中秋節・千秋節・月宮鏡」『中国文物報』1992年９月13日号。

(19)　周世栄『銅鏡図案―湖南出土歴代銅鏡』(1987年)，図版203。

(20)　『博古図』巻29，15葉。

(21)　本鏡を梅原末治氏は，眞品とみなしているが，本文で述べたように全く信用し難い。梅原末治『唐鏡大観』解説(1948年)，5・6頁。

(22)　孟津県文物管理委員会・蘇健「洛陽発現銀殼画像銅鏡」『文物』1987年第12期，84頁。洛陽市博物館註(10)前掲書，彩版４。孫機「孟津所出銀殼画像鏡小議」『中国文物報』1990年９月20日号。

(23)　広西壮族自治区貴港市深釘嶺東漢１号墓出土の四龍鏡は，別模様の銀蓋を伴うが，これは貼銀とは全く異なるものである。広西壮族自治区博物館『広西銅鏡』(2004年)，図版78。

## 終 り に

以上，３つの問題を取り上げて述べた。これらは最初に指摘した「隋唐鏡の顕著な特質」のそれぞれ一部分を構成するものと言える。再度述べれば，それは西方世界とつながる国際性，北朝とつながる継続性，倣古・尚古の思想性ということになろう。それがまた直接・間接にわが日本に影響を及ぼしていないか，十分な検討を望みたい。

【付記】

第３章で取り上げた(永元五年)鏡に便乗したものに，(永元三年)画像鏡がある。筆者は資料としては扱っていない。浙江省博物館『古鏡今照・中国銅鏡研究会成員蔵鏡精粋』(2021年)、図版141。

かつて、よく似た「作品」が日本にも来ていた。日本文化資料センター『地中の宝と伝世の宝』148(2000年)，D2。銘「石氏作鏡世少有東王公西王母仙人侍左右周中玉女□□鼓白鹿周走食芝草千秋万生長久」